

志筑忠雄の所用印ともう一つの字^{あざな}

大島 明秀

はじめに

小説「長崎ぶらぶら節」の主人公・古賀十二郎は長崎郷土史の草分けとして知られる人物であるが、その研究範囲は、文事、宗教、絵画、工芸、科学、政治、対外関係、はては丸山遊女に至るまで地元のあらゆる題材に及び、成果の多くは書籍となつて発表されている。無論、かかる著述は一朝一夕に成されたものではなく、時間と労力をかけた丹念な調査に基づいている。

ときに、長崎歴史文化博物館に所蔵される「玉園雜綴」は古賀十二郎の覚書で、執筆の際に参考としたいいわゆる研究ノートのようなものである。これを繙いてみると、古賀の各種著作に見える記事とともに、活字に至らなかつた未発表の記事も確認でき、中には目下所在不明となつている資料の情報まで記されている。そこで本稿では、「玉園雜綴」を手掛かりに、これまで確認されたことのない志筑忠雄旧蔵の印と、印記に見える志筑の字、そしてそれが意味するところについて少しく検討する。

一、「玉園雜綴」に見える志筑忠雄研究

古賀十二郎「玉園雜綴」は五九冊にも及ぶ大部の草稿で、その第五五冊の前半部には近世の洋学について調査したところが記されており、一頁から一三頁にかけて、丸印や三角印などを用いた一つ書き形式で志筑忠雄に対するいくつかの言及が見える。

これらを紹介すると、まず、もと長崎の町医者で、後に肥後の古城医学学校長となつた吉雄圭齋より話を聞いた「大槻氏」(＝大槻如電)から得た情報として、志筑の人となりと学問背景を紹介している。

○中野柳圃／口キカズ(ドモリナルモノカ) 同僚
知己ニ／侮ランなり。 本木氏ノス、メヨリ 天
文学ノ研究ニ志シナリト。 吉雄圭齋談リ／シ由。
大槻氏談。²

今日でも囁かれる志筑の口舌不得手説や、本木良永との間柄については吉雄圭齋の談に由来し、それを大槻如電が広めたようである。ただし、これらを裏付ける確たる証拠は現在まで見つかつておらず、いまだ推測の域を出ない。

続いて古賀は、志筑の各種著述について調査したところを記す。

○明治十四年・長崎来遊ノ際 堀一正氏ノヨリ「柳圃文法」ヲモラツタ。之ハ／蘭文デ認メタモノナル、³

○柳圃先生遺教 蘭語九品集ハ／馬場佐十郎ノ著ナリ、⁴

○志筑柳圃 求力論 大槻平泉ノ／蔵書中ニアツタ。三年許前之ヲ／発見シタ。⁵

○志筑ノ八円儀一部ハ、自筆カト思フ。／但八円儀ハ二本アリ。之ヲ蔵ス、⁶

○大槻玄沢宛志筑忠次郎書翰一／通アリ⁷

○志筑ノ蘭文掛物一幅アリ、⁸

へ△二国会盟録ハ大槻氏宅ニナシ。箕作家之ヲ蔵ス。大槻氏談。西海遺殊ノウチニアルモノカ。⁹

引用文中に登場する「柳圃文法」、「蘭語九品集」、「求力（法）論」、「八円儀」、「大槻玄沢宛書翰」、「蘭文掛物」

はいずれも現存が確認できる志筑に係る著述であるが、併せて古賀はこれまで論及されたことの無い資料について記録している。それこそが志筑忠雄の所用印である。

二、古賀十二郎が摸写した志筑所用印と別字

古賀十二郎は、志筑忠雄に係る二種の印影を「現物大」で摸写したことを報告している（図1、図2）。一つは「白字」、すなわち陰刻の印顆で、およそ縦二・二糎×横二・三糎の方印、印記は「忠雄之印」。いま一つは「朱字」つまり陽刻の印顆で、およそ縦二・〇糎×横二・二糎の方



図1 「忠雄之印」印の摸写
（古賀十二郎記「玉園雑綴」55、長崎歴史文化博物館蔵、p.12.）

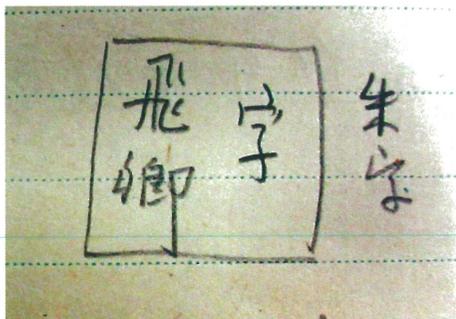


図2 「字飛卿」印の摸写
（古賀十二郎記「玉園雑綴」55、長崎歴史文化博物館蔵、p.12.）

印、朱の印肉が用いられており、印記は「字飛卿」。なお、印影を採取した底本については言及が認められない。

古賀は、志筑の名前について「通称を忠次郎といひ、名は盈長、のち忠雄、字は飛卿、柳圃と号す¹⁰」と説いているが、古賀の教えを受け長崎学を後継した渡辺庫輔は、志筑の著訳書を博搜し、上記に加えて「季飛」・「季龍」という新たな字を発見する一方、さきに古賀が指摘した「飛卿」については、「古賀先生は「飛卿」といはれたが、この字は未だ見ない¹¹」と、その存在に疑義を呈した。

なるほど「字飛卿」あるいは「忠雄之印」の印類や、両印影を備えた底本は発見されずに今日に至っているが、しかしながら、今回古賀の研究ノートに摸写が認められたことから、二種の志筑忠雄所用印は確かに存在し、その印記から志筑が「飛卿」という字を有していたと考えるのが自然であろう。

おわりに

おわりに、想像を広げて志筑の号と字の命名背景を検討して擲筆する。

まず、よく知られた晩年の号である「柳圃」は、ひ弱な体質の謂である「蒲柳の質」に、病弱な自身を掛けたものと考えられよう。

次に、渡辺庫輔が報告した字「季飛」・「季龍」にはその出自が関係していよう。志筑は長崎で三井の用達を業としていた三代中野用助の五男で、男子としては末子であった¹²ことから排行を表す「季」を付したものと見られる。

最後に、今回主題としたもう一つの字「飛卿」については、故人に因んで字を付す場合があることを踏まえると、志筑が自身を晩唐の詩人温庭筠（飛卿）に見立てたことが窺えないだろうか。飛卿は詩才がありながらも素行の悪さから官職に就けず、生涯野にあった人物である。

志筑は若くして「病氣」を理由に阿蘭陀稽古通詞を辞し、爾後没するまで野にあった。このことから、才能に対する矜持と仕官していない立場に対する自嘲を込めて志筑が「飛卿」という名を用いたと考えるのは、思いを巡らせすぎであろうか。

注

- 1 拙稿「熊本藩の治痘」（青木歳幸、大島明秀、W・ミヒエル共編『天然痘との闘い 九州の種痘』、岩田書院、二〇一八年）、二五六、二六〇頁。
- 2 古賀十二郎「玉園雜綴」五五（手稿、鉛筆、長崎歴史文化博物館蔵）、一一頁。修正前の記述は省略し、古賀の朱や訂正などを反映させた形で記した。以下、同。
- 3 前掲古賀十二郎「玉園雜綴」五五、一一頁。
- 4 前掲古賀十二郎「玉園雜綴」五五、一一頁。
- 5 前掲古賀十二郎「玉園雜綴」五五、一二頁。
- 6 前掲古賀十二郎「玉園雜綴」五五、一二頁。
- 7 前掲古賀十二郎「玉園雜綴」五五、一二頁。
- 8 前掲古賀十二郎「玉園雜綴」五五、一二頁。
- 9 前掲古賀十二郎「玉園雜綴」五五、一三頁。
- 10 古賀十二郎著、長崎学会編『長崎洋学史』上卷（長崎学会、一九六六年）、三二九頁。
- 11 渡辺庫輔『阿蘭陀通詞志筑氏事略』（長崎学会、一九五七年）、六〇頁。なお、渡辺は「未公刊長崎市史洋学編」と呼ぶ資料から、古賀十二郎が「飛卿」字を指摘していることを知ったようである。
- 12 松尾龍之介（「研究ノート」）志筑忠雄の実家

—中野家に関するノート」（『洋学史研究』第二六号、二〇〇九年）、一〇五頁。

【付記】

シーボルト記念館の織田毅館長より「玉園雜綴」についての御教示を得た。ここに記して謝意としたい。